

## 中支の山岳戦

宮城県 阿部 保雄

兄弟四人の普通の家庭生活を営む農家の長男として生を享ける。

私は卒寿を過ぎて記憶も定かでない昨今だが、当時友人の須藤・三十三歳、阿部・三十二歳、佐々木・三十一歳、赤間・三十歳と一緒に戦場に出征し、うち須藤は戦死、残る二人も病に斃れ、故人になつてから十年程になり、あの当時の戦場の様子を後世に伝えるには、残つた私に責任があるのではと、体験を語ることを心に決めました。

想えば、支那事変勃発当初の二十二歳頃、青年団長に選ばれ、忙しい毎日の中で先輩の方々の幟を書くのを真似て、五人程に「祝入営〇〇君」「祝出征〇〇君」と幟を書いた。太い筆を今も大事に保存しており、時折取り出して眺めては、一人言を言いながら往時を偲んでおります。

昭和八（一九三三）年の徴兵検査では、結果は予想していたものの国民兵役に編入され、肩身の狭い思いでしたが、その分銃後の守りを一生懸命頑張ろうと心に誓つたのでした。その頃国策で「生めよ殖やせよ」の掛け声に副つて、子宝五人に恵まれ、食糧増産等にも励んでいました。

昭和十六年、大東亜戦争に突入以来、戦線の南の方にまで拡大され、時が経つにつれ、これまでのように華々しい「占領」とか「陥落」と言う大々的なニュースも聞かれなくなり、戦況も重大な局面に突入した気配が感じられるようになりました。

昭和十九年四月十九日、召集令状が届きました。部落の皆様の心を込めての千人針を妻より手渡され、これをしっかり身に付け、同郷の四人共々、妻子や年老いた父や母を残し、大々的な旗、幟等も防諜上禁止されているので、心の中で軍歌「勝つて来るぞと勇ましく」を歌つての晴れの門出でした。

仙台歩兵第四連隊に入隊、陸軍二等兵の肩章が重く感じられ、心も落ち着きません。明朝三時、朝鮮羅南派遣の下命があり、兵舎を出発、軍用列車にて下関に下車、直ちに乗船、玄界灘の荒波にはほとんどの者が船酔いで生きた心地がしませんでした。しかし船は危険水域を無事に釜山港に上陸しました。

二十三日、朝鮮羅南歩兵第七十三連隊第二中隊第七班に編入され、直ちに軍事教育訓練が始まり、厳しい一期検閲も脱落せずに終了すると同時に、一等兵に進級しました。これ待つかのごとく、七月二十三日、中支派遣の下命あり、連隊本部を出発しました。

鮮満国境を通過、山海関、北京、天津を経由し、大陸の風景も見られなかった貨物列車の長旅も途中恙なく、徐州の甫口にて下車しました。南京へは船で渡り、一週間ぶりの宿営となりましたが、翌日より行軍で大谷まで、ここより船で揚子江を遡行、安慶、九江、漢口の時計台付近に八月四日

に上陸しました。

昭和二十年二月八日、松第六十八師団、独立歩兵第一一大隊第四中隊に転属となり、湘桂作戦に参加の命がありました。しかし雨期のため対岸の武昌国民学校に六カ月の長期宿営となり、その間、五月一日に上等兵に進級しました。

その後、反転作戦のため、石畳の道路を通り、登る途中、向こう側の山より激しい銃撃に遭いました。歩兵隊は身軽なので高い山に登り、牛を捕獲して食糧にする等がありました。大隊は支離滅裂となり彷徨を続ける状態となりました。大行荷隊は、そのまま逃げられずに捕虜になったとか、山岳地帯を敵に追い廻され二十一日間も逃げ続けました。

ある時は大木の股を利用した敵の狙撃を受けたりました。身近な所で煙が出たので覗いて見ると、敵にも天晴な兵がいて、爆弾を抱いて我々の身近に迫り、自身のみ焼死、爆発しなかったので、

命拾いをした事もあったという状態でした。

その後も転々と移動しているうち担架隊に配属となり、本隊に付いて行ったが見失ってしまいました。単身で本隊の所在を探索すべく、山や谷を越えてようやく生き残っている二十五人程の兵たちには追いついたのですが、担架隊の許にはとても戻れそうもないと判断したので、そのまま本隊と同行することにしました。

そのうちに川に差し掛かり、飛び石伝いに対岸に渡り、部落に着くや早速飯盒炊飯し、久しぶりに食事を済ませました。そして山に登って行くと、無線連絡による負傷者が続々と集結していました。その中には負傷の上、ずぶ濡れになった中隊長殿がおられたので、持っていた余分の肌着で更衣して貰いました。また部隊長殿以下食事をとっておられなかったので、飯盒いっぱい詰めて来たのを皆に振る舞い喜ばれました。

その晩のうちに道路が見付かり、行軍をしていたが敵を発見したので、右に曲がったり、谷間や

山越えなどしつ十一日間も敵を避けながら行きました。しかし昼は行軍できず、高い山に登り、壕を掘り待機していました。そこで同郷の赤間君が足を負傷しましたが軽微でした。

東安県大廟の望楼は行く時は何事もなく通過したのですが、今度は銃眼より猛射を受け、五月二十五日、右手下部に貫通銃創を受けました。当番をしていた安藤曹長殿に応急手当をして頂き、湖南省の野戦病院に入院加療、六月三十日、どうか銃が持てるとうので退院、原隊復帰しました。早速、行軍となり、腰まで水に漬って渡河しました。そして堤防に遮蔽していると、前方の部落より頭上すれすれの銃撃に邁りました。しばらくすると敵影も見られなくなったので橋を渡り、七キロ位行軍して警備隊の駐屯地に到着しました。ここから軽列車で鉄橋を渡りはじめると、急に列車が宙吊りになり、枕木で腰部に打撲を受け動けなくなりました。

幸い鉄道隊の船に救助され、陸に上がり、再び軽列車では、夜が明けると空襲を受けるので、身動きもできず人の助けを求めのみでした。

一カ月程の療養生活をし復帰すると疲れたせいかマラリアに冒されましたが、大した事はありませんでした。安藤曹長殿に「入院下番兵の宿舎の警備に行った方がよい」と言われました。

日中は航空監視として高台の木の杭に括り付けた対空高射砲の弾薬手として、夜は宿舎の一〇〇メートル周囲の動哨警備をしていました。ある夜半のこと、裏門付近が急に明るくなったので駆けつけて見ると、バケツの重油が燃え出していました。急遽、側の堀に蹴落としたら逃げる人影が見付かったので、非常呼集を掛け付近を調べると「ダINAマイト」が置かれてあったのです。しかし早く処置したので大事に至らずに済みました。そんな事もあり「マラリア」もお陰で治癒しました。

その後、祀陽県東南方、大盤平付近にて終戦を迎え、衝陽郊外の収容所に集結、安藤曹長殿より大隊本部の経理勤務を命ぜられました。下士官の中に兵卒一人であったので大した仕事もなく、安穩な生活で、時折、寺田兵長殿との買物の運搬役で毎日を送っていました。

昭和二十一年六月一日、上海郊外に集結のため、浦口より曳き船にて上海に到着しましたが、時化のため接岸できず、海の中に飛び降り、私物は海に流されるやら大変でした。

六月十五日、上海を出港、航海も無事に二十二日、九州の佐世保港に上陸、各種検疫を受けたのち二十五日に召集解除となりました。

復員列車で空爆による焼野ガ原になった悲惨な都会の被爆の跡を眺めつつ、一路列車は北の故郷目指してひた走り、仙台にて乗り換えのため下車しました。すると雑踏の中でふと気付き、腰の鞆に手をやったら支給された虎の子の四二五円、金額すられ、無一文となりましたが、無事な姿を家

族に喜んで迎えられた当時を想い浮かべ、妻共々  
苦笑しての余生を安楽に送る毎日です。

## 山西の追憶

福岡県 井上文助

私は、両親の許に六人兄妹の四男として生まれました。兄三人に次ぐ四男で、妹が二人おりました。家業は漁業でした。小さな舟を二、三艘（手漕とポンポン船）を持っていました。一本釣漁法で筑前の近海に出ては鯛、鯖、鰯などを漁獲していました。

生活様式は一般並でした。近隣の人達も毎日を楽ししく、笑い声の絶えることなく人情味豊かで、他人の子供も自宅の子も同じように可愛がり、時には怒鳴って社会教育をしていました。幼少の頃は至極幸福でした。

私が小学校六年生の時に、父親が他界したことが一番残念でした。長兄が家業の後を継いで、従前通りの生活を守ってくれました。今思っても兄達は大変だったろうと感謝しています。私も小学